
ニガーマウンテン

山野つつじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニガーマウンテン

【Nコード】

N3547BA

【作者名】

山野つつじ

【あらすじ】

アメリカ南部の田舎町、ここには有色人種は一人も居ない。そんな町で子ども達が歌う唄。

一体この町で何があったのだろうか？

町の子どもが歌う唄（前書き）

ニガーという言葉は特定の人種に対しての差別・侮蔑の言葉になります。

しかし作者の住む町からほど遠くない場所には人々にそう呼ばれる山が現存しています。このお話はその山の名前からイメージを膨らませて作っています。特定の人種への差別や侮蔑を意図していいことを御了承頂きたく思います。

町の子どもが歌う唄

ニガーマウンテン ニガーマウンテン
白人は行っちゃいけないよ
ニガーマウンテン ニガーマウンテン
行ったら両手をもがれるよ

遠くでピアノが聞こえたら
急いで家に帰るんだ
秘密の箱は開けるなよ
あの子がきつとやってくる
それを返せとやってくる

ニガーマウンテン ニガーマウンテン
山に登っちゃいけないよ
ニガーマウンテン ニガーマウンテン
行ったら両手をもがれるよ

あの日の秘密はみんなの秘密
人に話しちゃいけないよ
みんなで口を閉ざすんだ
あの子がいつも探してる
それを返せとやってくる

僕の住むアメリカ南部の小さな町の側に、ニガーマウンテンという山がある。

山と言っても、大きな丘ぐらいの大きさだ。
今は汚い言葉や人種差別的な言葉は、学校でも禁止になっている。
それなのに、なんであの山はニガーマウンテンという名前なんだ

ろう。

どうしてあの山がそう呼ばれるのかを大人にたち聞いても誰もちゃんと訳を話そうとはしない。

そういう大人たちの様子が、僕ら子どもたちの想像を更に掻き立てる。

何か忌まわしい出来事があつたんじゃないかって、子どもたちはみんなそう思っている。

どんなことが過去にあつたのか子どもたちは誰も知らないけれど、みんな同じようにニガーマウンテンの歌をうたってる。

あの山に行っちゃいけないよ、って。

この町にある あの手

僕の名前はジム。

アメリカ南部の州の小さな田舎町に住んでいる。

おじいちゃんが二十代の頃にバージニアでおばあちゃんと結婚して、教師としてここに移り住んだことが始まりで、僕ら家族はこの町に根付いている。

お父さんはここで生まれ、ここに住んでいたお母さんと結婚した。僕ら三世代の家族は幸せに暮らしていたんだ。

だけど、昨年おばあちゃんが死んで、続いてお父さんとお母さんが離婚して、今はおじいちゃんとお父さんと僕がこの町で一緒に暮らしているんだ。

お母さんがいないのは寂しいけれど、それでも家族みんな協力しあって仲良く暮らしている。

何よりも嬉しいのは、大好きなおじいちゃんが、仕事で忙しいお父さんに代わってなるべく僕との時間を作ってくれることだった。

学校が終わって家に帰ると、おじいちゃんはいつも畑仕事や牛の世話をしている。そして、僕を呼んでは一緒に作業をしながら、今日の学校での出来事や昔話を二人で楽しむんだ。

僕の知らない昔の出来事や僕が行ったことがないような場所の話しをたくさんしてくれる。

それは僕の好きな時間の一つなんだ。

以前、おじいちゃんに「なんでみんながあの手のことをみんながニガーマウンテンと呼ぶの？」と聞いたことがあったんだ。おじいちゃんは、「うーん、まあ悲しい出来事があったからなあ…」といったまま口を閉ざしてしまった。お父さんにしても同じで、適当な返事をして決して「あの手」についての問いに答える大人はこの町には誰一人いない。

誰もが口にしない過去が、僕の興味を大きく膨らませていくだけだった。

そもそも、なんであの山の名前の由来が気になったかというところ、学校で僕をいじめる子どもたちが意地悪なことを言うからなんだ。先生がいらないランチの時間になると、言いがかりをつけて何かと嫌がらせをしてくるいじめっ子がいる。彼らは、僕の洋服の襟足を掴んで、「弱虫ジムをニガーマウンテンの天辺にある木に縛り付けてやる」とみんなの前でからかうんだ。

僕がいかに弱い存在であるかをみんなに見せ付けているだけなんだ。

その証拠に、彼らが僕を小突いたり、ランチのプレートをひっくり返したりはするけれど、本当に僕をニガーマウンテンに連れて行ったり、天辺にある木に縛り付けたりなんてことはしないのだからニガーマウンテンに行く子どもなんて誰もいやしない。

子どもが口にする唄でさえ、行こうと思う気持ちなんか留まらせてしまう。

この町に住む人々はあの山の何かを恐れている。

強気に見えるいじめっ子たちでさえもあの山にいかないのは、何かを怖がってるからなんだと僕は思っている。

「あの山には白人は行ってはいけない」って歌はいうんだけど、僕の住む町では有色人種はおろか、黒人なんて見たことない。

おじいちゃんが前に、「この町に住んでいた黒人は、ちょうどお父さんと同じ世代の子どもとその両親の大家族が最後だ」って言うてた。

唄の中で「白人は行っちゃいけない」って言うけれど、この町には白人しかいないのだから、「誰一人あの山には行くな」ということを唄は意味しているんだろう。

いじめっ子たちは僕にしつこく言うものだから、いつかあの山の天辺に本当に木があるのかを確かめてみようと思っていた。

唄の秘密を確かめられたら、僕はいじめっ子たちよりも強くなれ

るような気がしていたんだ。

それに好奇心は、僕の成長と共にがどんどん大きく膨らんでいて、行動を起こす日を待つばかりになっていたんだ。

そう、僕はフィフスグレイド（日本でいう小学校五年生）なんだから、もうあの山に一人で行く体力さえも十分にもっているのだから。

行ってはいけない唄の場所

サンクスギビングデーがくる前の木曜日、学校でPTAの面談があつて、いつもよりも三時間早く学校が終わった。お父さんは仕事から帰るにはまだずっと早い時間で、おじいちゃんは学校で先生と面談をしていた。

僕が一人で冒険にでるのなら、その日は今日だと思った。

ニガーマウンテンの天辺を見ようと、僕は誰にも告げずに山へ向かった。

家を出て、店が並ぶ町の中央にある道を一人で歩く。

ここは本当に小さな町で、店というのは町の中央に集まっているだけ。

そもそも人も多く住んでいないから、店が密集していても賑わいなんていうものはないんだ。

それでももし、町の外れにある墓地に行くまでに誰かに会ったとしたら、きっと僕は山に行かずに家に引き返していたような気がする。

何せ、誰もが行くことのない場所に行くのだから、誰かに見られてしまつては秘密の行動が他の人に知られかねない。

たった一人が話す話題は、翌日にはみんなの耳に入るなんてことは、田舎の良い部分でも悪い部分でもあるということが子どもの僕にさえわかるような土地柄なんだ。

今日は学校へ出かけている人が多いというのもあつて、山の入り口に着くまで誰とも会うことがなかった。

ドキドキしながら町を歩くことになるなんて、山に行こうとしなかったら一生経験しなかっただろうな、と自分で思つて小さく笑つた。

町の外れの墓地まで歩いた僕は、大きな深呼吸を数回して、薄暗い木々に覆われた山に足を踏み出した。

山道といっても、そこには作られた道なんかはなかった。

木が生い茂り、上を見ると木漏れ日がキラキラしていたけれど、地表まで明るさが届くことはなく、薄暗く少し湿ったような動きの無い空気が流れていてた。

自然が生み出した名前も知らないキノコや苔が、腐った倒木の上で威張って生えている。

僕の歩く足音は、静寂の世界の中でとても大きく聞こえるような気がした。

それは、長い間誰も立ち入ることのない山であったという証のよう感じた。

二十分程のゆるやかな山道を歩いた頃、僕の前方に眩しい太陽の日差しが当たる場所が見えてきた。

そこが頂上に近い場所なのだろうという予感がして、明るく日の差す場所に向かって思い切り走った。

太陽の眩しい光が僕の視界の世界を金色に見せた。

そこには山道の中で見たような生い茂る木々はなく、茶色に変わったイネ科の草の絨毯が風にそよいでいるだけだった。

今までとまるっきり違う風景は、僕が突然夢の中に入ってしまったかのような錯覚をさせた。

山の肌を渡る風が、僕の少し温まった体を撫でていく。

「ああ、気持ちいい」

誰もいないからなのか、感じたままの言葉が口から流れてきた。

ここから僕は、秋色に染まった草の海を飛ぶように歩いた。

すると、頂上らしき場所に大きな木が見えた。

「ニガーマウンテンの天辺だ！」

僕の歩みは速くなり、あっという間に大きな木の下に辿り着いた。その木の幹は、僕の両手では抱えられない程に太くたくましい姿をしていた。

「いじめっ子たちが言う木は、本当にあったんだ」

本当に存在する木を見てびっくりしたけれど、怖いという気持ちが湧いてくる場所としては、ここは遠いような気がした。

ここから見渡す自然の風景は、あまりにも美しかったからだ。

僕は、秘密の計画をやり遂げた自分への褒美の一つとして、木の根元に腰掛けて景色を眺めて一休みした。

山の入り口の手前にある教会と墓地、学校、子ども達が遊んでいる公園。

町の中の木々が黄色や茶色の秋色に染まり、僕の町の全てが秋色だった。

ここから見る全てが僕の住む町の秋の風景で、そんな美しい町に僕が住んでいるということに感動した。

そんなに長く居たような気がしなかったのだが、あまりの美しさに見とれてしまったせいかな、秋の夕方が思ったよりも早く訪れることをすっかり忘れていた。

空から降るオレンジ色の光が、にわかに弱くなってきたのに気づいて、急いで山を下りることにした。

草の海を歩き、再び木々の暗闇に入る少し手前で、僕が一休みした木の方を振り返った。

それは「美しい町の風景をもう一度見に来たいな」という別れを惜しむ軽い行動だったんだと思う。

「あれ？」

僕は瞬きを数回した。

木から少し離れたところに男の子が立っている？

誰もいないと思っていたのに、そこには確かに男の子が立っている。

黒人の男の子が一人。

黒人は町には一人もいないはずなのに、なぜ？

僕の体は彼を見つめたまま動かなくなっていた。

そして、ただ彼は僕をじっと見ている。

彼の表情がよくわからないという距離なのに、さっき見た美しい

景色の思い出が真っ黒になってしまふほどの悲しさと失望感が僕の心に一気に波のように押し寄せて来た。

彼がニガーマウンテンの唄にでてくる「子」であることは、直感でわかった。

僕は恐怖の海に溺れつつあった。

ニガーマウンテンの唄が僕の頭の中に流れてきたからだった。

「うわあぁーっ！」

声にならない叫びを出すしかなかった。

そうしないと、僕はずっとその場所から動けなくなるような気がしたんだ。

薄暗い木々に向かって一目散に走った。

走らなかつたら黒人の男の子はついてくるんじゃないかと思って、胸が苦しくても絶対に止まることはできない。

とにかく明かりが見えるまでは、どうしても足を止めることはできなかつたんだ。

どれくらいの時間走ったんだろう？

明かりが灯り始めた町の外れの教会にまで来ていた。

自分の心臓の鼓動はうるさいと感じるくらいに脈を打ち、足は恐怖と急激な運動のためにガクガクしていた。

自分の家の明かりを目指して、自分の荒い呼吸を聞きながら歩いた。

玄関のドアを開けると、おじいちゃんとお父さんがダイニングに座ってテレビを見ていた。

「ジム、一体どこに行ってたんだ？」

お父さんの言葉に、僕の体がビクツと反応してしまった。

行ってはいけない場所に行ったことを悟られないように、自分の動揺を見せないように振舞おうと、考えれば考えるほど僕は答えに詰まってしまっていた。

「いいか、ジム。デートをするならお父さんにちゃんと紹介してからにしろよ」

お父さんがそういうと、おじいちゃんとお父さんは二人で笑い出した。

「そんなんじゃないよ！そんなんじゃない……」

少しむきになって答えた僕だったが、二人の笑い声を聞いて、家に帰ってこられた安心感を感じた。

その夜、おじいちゃんもお父さんも僕がほとんど話をしない様子を心配そうに眺めていたのを知ってる。

夕飯の時に、「どうした？学校で何かあったのか？」とお父さんが聞いてきたんだけど、僕は思い切り長い時間走った足の疲れと思いつく怖さも手伝って、「ううん……」と答えるのが精一杯だった。自分の部屋のベットに寝転んで、あの黒人少年のことを思い出していた。

あの黒人の男の子は、悲しみに満ち溢れていた。

もし誰かが彼を見たとしたら、どんな人間でも彼の抱える悲しみの理由を知りたくなるんじゃないかと思う。

人にそう思わせるくらいの深い悲しみの闇が、あの男の子の体には溢れていた。

なぜにあそこまで悲しみに満ちているのか、どうして彼があそこに現れたのか、怖い思いをしたクセに僕の好奇心は止まることがなかった。

外では夜の闇の中で、コヨーテの遠吠えが響いている。

女の泣き声のように響くコヨーテの声が、いつもよりも悲しげに聞こえる夜だった。

ヘレナ

翌朝、僕はもやもやとする気持ちを抱えながら学校へ行った。

黒人少年のことや過去の出来事について知りたいことはたくさんあるけれど、何から一体調べればいいんだろう。

誰に聞いたらいいのか、それとも図書館にいつて古い新聞を読んでみようかと、机に座り頬杖をついて考えこんでいた。

その視線の中には、ヘレナがいた。

彼女は学校の中で一人にいることの多い、不思議な雰囲気を持つクラスメイトだ。

見た感じからすると、ただ大人しいという訳ではないみたいだ。

先生の問いにはつきりと答えることができるし、勉強もクラスの中では出来る部類にいる。

ただ、他の女の子がしないだろうと思うような難しそうな本を楽しそうに見ていることが多い。

だから仲間はずれというわけではなくて、この年齢で女の子が楽しむことが違ったり、みんなと同じように高揚したりすることがないだけなんだろう。

それと、他の子たちと馴染みにくい理由として、彼女の母親が町の東側の外れで、ヒーリングという店をしているからなのかもしれない。

彼女の家の隣に店があって、看板には手の形をしている。

そこには、「サイキックヒーリングの店」という文字が書いてあった。

町の人は、占いやサイキックなどの怪しげなものを信じていないというのもあって、よく彼女の母親の店を「きちがいの店」と呼んでいた。

ほとんど一人で過ごしているように見えるヘレナではあるが、寂しげな様子を見せるということも見たことがなかった。

きっと彼女は、一人の時間を十分に楽しむことができる子なんだろうと思った。

僕は昨日のことを一人で心にしまっておくことが苦しかった。

あまりに強烈に心に残ってしまった出来事だったので、忘れようにもすぐに頭の隅から顔を覗かせるんだ。

誰かに話すことで、僕は少し自分の抱えてしまった出来事を軽く出来るようにおもった。

かといって、行っではいけない場所にいったことや黒人の男の子の話しを誰にでもできる話しじゃない。きっと誰も信じないだろうし、こんな話しをすることで馬鹿にされるのは嫌だった。

たまたま視線の先にいたヘレナは、昨日の出来事や僕の抱えている「知りたい」に唯一耳を傾けてくれそうな人物だと感じた僕は、二人で話ができそうな絶好のタイミングをじっくりと待つことにしたんだ。

お昼休みにいじめっ子たちの目を掻い潜って外にでると、一人で木陰の下ベンチに座って本を読んでいたヘレナを見つけることができた。

静かに座っている彼女を驚かせないように、横に座った。

唐突に彼女に話しかけた。

「ねえ、幽霊って信じる？」

彼女はグリーンの眼をくりくりさせて僕に答えた。

「ジム？幽霊はいるのよ。ただそれが見えるか見えないかだけの問題よ」

その答えを聞いて、ヘレナなら僕の話をもとに聞いてくれるよな気がしたんだ。

「あのさ、僕見たんだ。黒人少年を……」

「ジム！もしかしてニガーマウンテンに行ったの？」

僕は小さく一回頷いた。

「でも、両手もがれなかったんだね…、ちゃんと両手ついてるよ。」

彼女は僕の両手をじろじろと見て確認しているようだった。

「僕が山を降りようとして振り返った時だったんだ。黒人少年が立ってたんだよ」

「それでそれで？」と、彼女が身を乗り出す。

「あの黒人少年が、どうしても気になるんだ。誰もがあの山や彼のことを怖がっているけれど、僕にはあの黒人少年がとても怖い幽霊だとは思えなかったんだ。」

彼女は僕の眼をまっすぐに見つめてこう言った。

「私もね、実はニガーマウンテンの唄には前から興味があったの。だけど、一人じゃあの山に行く勇氣はなかったわ。ジム、あなたすごいわよ」

こんなことはとても褒められたことじゃないのはわかってはいたけれど、やっぱり女の子に「すごい」と言われるのはまんざらでもない。そんな気持ちになったせいか、自分の顔が赤く火照っていくのを感じた。

「私はママに少し話を聞いたのよ。ママが私より少し小さいくらいの時に、黒人の男の子が学校に一人いたんだって。とってもピアノが上手だったんだけど、事故があって、その後少しして亡くなっただけだよ」

ヘレナの言葉で黒人の男の子のことを考えていると、僕を見つめていた姿が再び頭の中に浮かび上がった。

暖かい午後の日差しの中にいるのに、ゾクゾクして自分の体の産毛が逆立っていくのがわかった。

「ねえ、もっと詳しく話を聞きたかったらママに会ってみる？それともきちがいの店だから…：やめとく？」

そういうとヘレナは、ちょっと大人びた笑みを浮かべて僕の顔を見た。

僕が返事をすぐに言わなかったのがもどかしかったのか、ヘレナ

は急に立ち上がった。

「知りたいことがあったら、また声をかけて。私で役に立つなら……」

僕は彼女の言葉を遮った。

「今日！今日行っても……、いいかな？」

僕の話をちゃんと聞いてくれたヘレナに、僕が彼女の母親の店をきがいのお店と誤解されていると誤解されなくなかった。

「オーキドーク！じゃあ帰る時にまたここで！」

僕の返事が彼女を笑顔にしたのは間違いなかった。

僕は正直迷っていたんだ。

あの唄や黒人少年の深い悲しみの理由や、あの唄の意味、彼に何が起こったのかを知りたいけれど、今まで誰もが口を閉ざしてきたのかという理由を考えていたから。

あんな唄があるにも関わらず、しかも小さな噂が翌日には町全部に知れ渡るといふ町なのに、ニガーマウンテンのことは誰も語らない。

もしかしたら、口に出来ないほどの怖ろしい何かがあったのかもしれない。

語られない出来事を調べてしまっているのだろうか？

そんな禁断の箱を、僕みたいな子どもが開けてしまっているのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3547ba/>

ニガーマウンテン

2012年1月13日01時52分発行